

〔補論〕ダトリー家族史―清教徒の歴史とニューイングランド建設

ロンドン王立協会への寄稿者ポール・ダドリーの家系は、イギリス女王エリザベス一世の寵臣たるライセスタ―伯爵ロバート・ダドリーの一門に属し、同家歴代の経歴はニューイングランド創設に献身した清教徒の歴史を如実に示す。マサチューセッツの植民地総督を勤めたポールの祖父トマス・ダトリーについて、アウグスチヌ・ジョーンズによる詳細な評伝『トーマス・ダトリーの生涯と業績』は、つぎのように述べる。

総督トマス・ゲトリ―は隊長ロジャ・ゲトリ―のひとり息子であつて、フランスのアンリ四世が（カトリック同盟の最高指導者）シャルル・マイヨンス公に決定的な勝利を収めた戦場で、父ロジャ―は戦死したと伝えられる。ヴルウバイ公指揮のイギリス軍のなかで、まさしく彼は戦つたのである。①

一五六二年フランスでは約四十年にわたるユグノー戦争が始まり、ネーデルランドのプロテスタント勢力を支援するエリザベス女王は、一五八五年カトリック同盟のスペイン軍に抗するため、ライセスタ―伯爵ダドリーを指揮官とするイギリス軍を出兵させた。この戦場で伯爵の甥であるフィリップ・シドニーが悲壮な最期を遂げ、高名な詩人にして忠誠な廷臣の死が国葬によつて哀悼される。その五年後ポールの曾祖父ロジャ―・ダドリーも、同じくユグノー戦争渦中のフランスに隊長として派遣され、カトリック同盟との戦闘において倒れた。プロテス

① Augustine Jones, *The Life and Works of Thomas Dudley*, Boston, 1900, pp.2-3

タントの戦いに殉じたシドニーとロジャ―は、一門において後世ながく追慕される。①

一六七四年ノースアンプトンで出生したトマス・ダトリーは、父ロジャ―を喪つてまもなく、母とも死別し、篤志家のもとで養育された。なかでも慈愛深く聡明なブエロイ夫人のもとでラテン語等の学業をも始め、宗教的影響も受けたとされる。やがて彼はカンプトン男爵家のアシユバイ城において近習として奉仕するとともに、騎士に相応しい教養と武芸を修めた。② 以下成人したダトリーのフランス出征とナントの勅令に至るユグノー戦争の終結について、神父コットン・マザーの筆とされる小伝『トマス・ダトリー』を引用する。

かくしてノースアンプトン近隣で気概と才知ある若き貴紳として知られるうちに、女王からフランスへ出征する軍人徴募の要請が寄せられた。現地はアンリ四世のもとユグノー戦争の渦中にあり、ノースアンプトンではだれひとりこれに応じる若者がいない。ついに果敢な青年トマス・ダトリーがその隊長に選ばれ、隊員として八十名の派遣が決定された。トマスを長とする一隊は、学芸の府であるとともに、武術の殿堂でもあるフランスに上陸し、前線でも陣営でも肝要な軍事的手腕を、發揮できる機会に恵まれたわけである。フランスにおける彼らの使命は、アンリ四世のアミアン防御を支援することであつた。だが、双方の勢力が前線できまきに対峙したとき、なんらかの調停によつて和平の協定が結ばれ、目前の戦闘が回避された。アンリ

① Cotton Mather (supposed), *The Life of Mr. Thomas Dudley*, Cambridge, 1870, p.7.

② Jones, *op.cit.*, pp.14-15.

四世が剣を収めたと知らされ、流血なく使命の終了を果たしたダトリーは、この遠征で以後有力な手腕となる軍事的な技術と経験を体得し、イギリスへ帰国する。①

一五九八年信仰の自由を保障するナントの勅令が発布されて、フランスではユグノーの終結と国内統一が図られ、光輝ある絶対王政の基礎が確立する。歴史的転換から多大の影響を受けたトーマス・ダトリーは、ロンドンで法律の勉強と修業に努め、その後ながら二十一年近く主としてリンカーン伯爵家の要務を担当した。この間にイギリスでは一六〇三年エリザベス女王が逝去し、新たに即位した王権神授説の信奉者、ジェームズ一世がイギリス国教会への信仰を強制するに至った。こうした迫害を逃れる清教徒一〇二名は、一六二〇年メイフラワー号で新大陸へ出航し、成員相互の契約によってヴァージニア北部に植民地を創設すべく、《メイフラワー誓約》を船上で締結した。しかし、王位を継いだチャールズ一世も、専制と抑圧をさらに強め、一六二六年には戦費の増大を理由に苛酷な公債を強制した。これに抗議する貴紳六六名のひとりとして第四代リンカーン伯爵は一時投獄され、資産の一部を没収される。② マザーによる小伝をふたたび参照する

リンカーン伯爵の執事を九年か十年勤めたのち、煩雑な職務に飽きたトーマス・ダドリーは、引退して私

① Cotton Mather (supposed) , *The Life of Mr. Thomas Dudley*. Cambridge, 1870. pp.14-

② Jones, *op.cit.*, pp.25-26, 35-36, 43.

的な自由を享受したいと願うようになった。そのため彼は伯爵家を離れ、(リンコンシアの都市)ポストンで神父ジョン・コットンから住居を借り、以後神父と親密になった。とはいえ、数年を経ずしてリンカーン伯爵家の周辺ではトーマスの助力を要する難事が生じ、あたかも王者への救援を求められた古代エジプトのヨセフのごとく、急速彼はふたたび侯爵家の要職に就き、この一族とともにニューイングランドへ移住するまで継続する。この間に国中では不服従派への暗雲が立ち籠め、トーマスがその圧迫を痛感するに至る。そうした情勢のもとニューイングランドへの移住計画が進展し、彼もそれを好機としてイギリスから去る決意を固めた。未開のアメリカへ渡り、不服従派の同志ともども理想の極致とする自由を達成するのである。特許状を取得できぬゆえに、ニューイングランド行きへ最初に乗船したグループではなかった。だが、以後同行して、親しく接した人たちは、まもなくトーマスの英知と才幹を認識し、やがてウインスロブに次ぐ副総督に選出する。①

トーマス・ダドリーはしばらく引退してリンコンシアのポストンに住み、おそらく当地の教会でジョン・コットン神父の説教を聴いた。この神父こと後年マサチューセッツのポストンにおいてもっとも著名な説教者としてながく仰がれる。〔中略〕
こうしてダトリーを囲むさまざまな環境、周囲の世情や人心が人生行路の帰趨に多大の影響を与えた。

① Cotton Mather (supposed) , *The Life of Mr. Thomas Dudley*, pp.14.

「ニューイングランドへの入植が企画され始めると、トーマス・ダドリーはそれを好機とし、イギリスを去って未開の地アメリカへ渡航する決意を固めた。そこにおいて他の非国教徒とともに念願の自由を貫く希望に燃えたのである。認可が遅れたために、ニューイングランドへ渡る第一陣にはいなかった。だが、渡航者のなかで彼が知られるやだれもが、その英知と才能を認識し、ウインスロプに次ぐ第二位、総督代理に彼を選んだ。①

〔未完〕

① Cotton Mather (supposed), *The Life of Mr. Thomas Dudley*. Cambridge, 1870. pp.14-